

1. ドウツス・カタリーナ（ドイツ、ケルン日本文化会館）

「ドイツにおける日本語教育の現状 広がる日本語教育と学習者の多様化」

ドイツでは現在、約1万5千人の学習者が日本語を学習している。日本語は主なヨーロッパ言語に比べれば学習者数が少ないものの、非ヨーロッパ言語の中では、学習者数が多く、高い地位を占めていることが分かる。ドイツにおける日本語教育の特徴として、大学や高校以外の教育機関に、約6千5百人の学習者がいることが挙げられる。ドイツのあらゆる町にある市民大学（カルチャーセンター）が日本語の講座を設けている。また、ドイツの日本語教師にネイティブスピーカーが多いのも、一つの特徴であると言える。今回の発表では、中等教育における日本語教育、「ヨーロッパ言語共通参照枠組み」の導入、学習者の多様化について紹介した。

1982年に一つの学校で始まった日本語教育が発展し、1999年にはドイツ全国レベルで日本語が高校卒業試験（大学入学資格試験）の科目として認定され、2004年に初の試験が実施されたことを紹介した。このようなシステム上の認定から、これからの中等教育での日本語教育が期待されている。しかし統一のガイドライン作りや教師養成の問題等もあり、解決すべき点がまだ多く残っている。

続いて、ドイツにおける「ヨーロッパ言語共通参照枠組み」の導入に伴う日本語教育への影響を検討し、日本語をCEFの枠組みにどう当てはめるかの解決が緊急の課題となっていることを示した。

最後に、学習者の多様化をテーマに、一般社会人を対象したケルン日本文化会館（国際交流基金のドイツ事務所）における初級日本語クラスの学習者と学習者動機を紹介した。最近ドイツでは日本の漫画・アニメ・音楽の人気の高まり、それをきっかけに日本語学習を始める若い人が増加している。また日本の伝統文化やスポーツ、日本の文字に興味を持った学習者や日本人と個人的に交流を持っている学習者もいる。様々な学習目的を持っている学習者を一つのクラスで教えるときの教師が教材選びや教え方の工夫のほかに、クラスの連帯感が生まれるための働きかけも大事な役割であると示した。

発表に対する質問：

- ドイツの大学入学資格試験における外国語選択について。
- ドイツでは日本人と触れ合う機会がどのくらいあるか。
- ドイツにおける日本語の自律学習はどのような状況にあるか。また、E-Learningはどの程度進んでいるか。

